田植前―矢掛里山ジョギング報告　２０１６．５．１０

朝五時半、今朝も電話は無かった。
では、と起きだしジョギングウェアを着る。
どのルートにするか？
西北方向とだけ決めて家を出る。
あまり走らない方向なのでカメラを背負う。
かすかな霧雨が落ちている。
村の西外れに出ると伽藍連山を雨雲がおおっている。
道々川を越えると伽藍山を越えてみたくなった。
浅海（あすみ）、できれば小田まで行こう。
そう決めた。
義母はひそやかな命を今だつないでいる。
であればぼくはサウンドな命を弾ませよう。

伽藍山の東麓の里山田の村に入る。
古民家再生ながら壁が押縁下見板張の家がある。
しかもガレージには旧式TOYOTAが。
違う方向に走ると珍しいものが目に入る。
そのすぐ上の石壁＋土塀の風情も素晴らしい。
この坂道を登り、峠の藤ヶ峠のトンネルを抜けて
江良へと向う。

トンネルの向うは急な下りとなって江良村へ。
下りきると、新緑に囲まれた、ゆるやかにカーブを描く道が続く。
道と森のコンビネーションが素晴らしいルートだ。
T字路に出て右へ曲がる。
反対、左手の森陰にはよくパトカーが一旦停止違反の車を待っている。
さすがに今朝は誰もいない。

右に曲がると視界が急に開けた。
ため池（日妻池）があり、小田の観音山が見える。
いつも車で通っているがちょっと思いがけない眺めだ。
と、思っていると理由が分った。
ため池沿いに茂っていた林をすっかり切り倒したのだ。
おかげで見晴らしがとても良くなった。
切り倒した木が池の端にいくつもの小山になっている。
まだこうして山を管理する人がいる。
そう思うと雲に巻かれた阿部山が何故か身近に見えた。

浅海（あすみ）の村に入り太郎丸の前を通る。
霧雨の中でも堂々たる建物だ。
昨年の秋の夜、ここで満月の写真を撮ったのを思い出す。
ついでにチシャノキにもよってみる。
新緑がみごとだろうと思ったが
まださほどの広がりは見せていない。

かつて海だったと言う浅海の田んぼに出ると高柳の鎮守の森が目につく。樹齢400年という榎木（西）と椋（東）の神木の下に2つの稲荷様がある。

田んぼの向うには1.5km に及ぶ直線道路が続き、その脇に一直線に立ち並ぶ無数の電柱が遠い距離を思わせる。この時間になるとあちこちに、散歩をしている村人の姿が見える。

田んぼを横切り、小田川の畔に出た。
家から４０分ほど走ってきたが、突然義母の耳を思い出した。
昨日、施設に出向いたおり、東京に住む義母の甥の嫁と言う人が見舞いにやってきた。事前の連絡も無かったので最初は一体誰かと思った。たまたま１人で施設に出向いたぼくと出会うのも正に偶然だった。

その人が声をかけても義母は反応しなかった。ブドウ糖が若干入った水の点滴だけになってもう10日たつ。顔を壁側に向けているので、こちらを向いた右耳の耳殻がよく見えた。その縁が干涸び始めている。

今頃家に電話がかかり家人があわてているのではないか？そこに居合わせない不都合を感じて、そこから戻ることにした。

ほどなく野宮の流れ橋が現れる。
いつだったかこの橋をお婆さんが自転車を押しながら渡っていた。
対岸のスーパーに買い物に行くのだ。
橋には欄干が無く、いささか危険だがもっと大きな橋は上下500m以上向うにしか無い。
霧雨の中で流れ橋の姿が川面にすっきりと写り、
何だかとても高い、危うい橋に見えた

江良の田んぼはもうすぐ田植だ。
そのためにも今日の雨は望ましい。
皆ひっそりと家の中で次の作業の日を待っている。
勝手気ままに伸びた竹やぶの分かれ道にさしかかる。
右手の奥の山懐に知人の書家がいる。
いかにもふさわしい佇まいだ。
ぼくは左に向う。
写真を撮りながら来たがあとは一気に家を目指す。

家に着き車庫のシャッターが閉まっているのを見てほっとする。今朝は未だ動きが無い。

義母は食事を摂らなくなり、飲み物を受け付けなくなり、水だけの点滴になり、その分の排泄もできなくなり、目や表情の反応も無くなった。しかし、脈と呼吸は続いている。着陸する飛行機が滑走路の上を超低空飛行で飛び続けている状態だろうか？もしかしたら山県県で見たミイラ達の様に器官としてのあらん限りの時間を生き抜き、解脱するつもりでいるのだろうか？　義母に身近に付き添って初めて知る人の命の終焉の極めて静かな有り様だ。

今朝はほぼ15kmを走った。消えそうな命の傍らで命を燃やす。それが太ももや、腰の筋肉の状態を心の中で覗き込む様な思いにつながり、不思議に快適に走れる。昨夜の残り湯で汗を流し、畑に出る。

問題のスナックエンドウ。隣のそれはまるで雑草の様に繁り、無数のエンドウが実を付けている。我家のそれは格段に稔りが少ない。一体何のせいだろう？土か？それにしては義母は隣の畑の様に無数に実らせるのが得意だった。